

脳出血始末記

Greatchain

2019/11/26

私はこの 10 日間ほどの間に、かなり重い脳出血を患った。かなり重いという言い方が正しいかどうか分からないが、私にとっては天地がひっくり返るほどの、あるいは、そんなことがありうるとは思いもよらなかった経験だった。医師の方々はこれを、高次脳機能障害とか、左皮質下出血と診断してくれているが、これがいったい何であったのか、私には全く分からない。どうやら「譫妄」(せんもう＝うわごと状態)という言葉が使われているようだが、この感覚の混濁を意味する言葉によって、何が言い表されているのか不明である。幻覚、妄想、錯乱、どれをとっても同じである。医師たちは「病理学」的な立場を取るであろう。しかし彼らには何もわかっていないはずである。病理学は、心霊的なものの一つにはならない。たとえば臨死体験のようなものが、科学的によく解明されている、などと言う人はいないはずである。いわばすべてが「霊界」のようなものである。

ほんの数日の間に、目まぐるしく次々と起こったことが、何であったのか、私にはいまだに理解できない。それは、不安と孤独とあせりの中に、拉致されたような感覚だった。時間がたつにつれて納得できることも起こった。特に私と妻の関係はだんだんわかってきた。しかし究極的にはすべてが不可解だった。特に私の内部で起こった、感情で最も恐ろしいのは、「不気味」という感情だった。これは簡単に克服できないものである。

私は、不気味で不可解な強制の世界に閉じ込められた。なぜかはわからない。私は服従のふりをした。そして騙されたふりをして、悪党どもの巣窟？に雑魚寝をした。これは策略で、密かに様子を伺うつもりだった。しかし悪党どもは、したたかで、私が暗闇で狸寝入りをしているのを見て、うふふと笑った。ひそかに抜け出してやろうと思ったが、喉がかわき、係りの女に水を求めると、彼女はペットボトルを一本くれた。そして窓を調べると、そこは鉄壁の防壁だった。そして私がこっそり出歩くと、「静かに寝ていろ」と彼女は意地悪く威嚇した。私の患者仲間も数いて、全員が声を潜め、経験のない不思議な魔術のようなことをやっていた。——それから先のことはわからない。

こうしたことすべては何とも説明できない。妄想？ 幻覚？ しかしそうだとすれば、あまりにもこの窓などの、完璧な冷たい質感や実在感が、圧倒的だった。私は、これは「脳のエラー」などと考えて、自分を納得させる気はない。これは納得できないが、しかし、

完全に充足して存在している何かである。私の「脳障害データ」などというものを信ずることはできない。(ちなみに、私は2年ほど前の、私の妻の臨死体験のようなものを通じて、不思議な知識を教えられた体験をもっている。しかしそれに、**それに類する知識だ**とだけ言っておこう。)

不思議な共感の事実がある——いっしょに娯楽ビデオなどを見た、私の無口の友人患者が、ポツンと言、「何か陰謀があるような気がする」と言った。それ以上彼は何も言わず、私もひと言、深く合意しただけだった。しかしその強力な感覚は、我々の間、そしてこの病院に遍在するものだった。

時間は前後するが、私に訪れた不思議な体験は、私が「病気」から完全に抜け出して、(恐怖はあっても)冷静だったときに起こったものである。私は、私の娘と婿の3人で部屋にいた。私と彼らと私の間に、感覚のズレがあるかもしれない——しかし私の目は、気味の悪いものを捉えていた。それは、テレビボックスのようなものの中に、崩れたドクロのようなものが、置かれていたことである。私はこれを長い間見ていたが、これが偶然、生じたものとは思えなかった。誰かが悪意でこれを工作したとしか考えられなかった。——何を馬鹿げた、と思わないでいただきたい。実はこれが常時、同じパターンで起こっているからである。これが確かに「工作」であることはやがて判明した。しかし、これがもし深夜個室で起こっていたとしたら、発狂するかもしれないようなものだった。

私は何とか弱虫を克服した。そして口に出して、この悪意あるものどもに挑戦した。私は自分に対しても、一般の教訓としても、勇気を奮って言おうとした——**脅しに屈するな、こけおどしを信ずるな、それは我々を騙し、乗っ取り、我々を弱体化しようとする意図をもつものだ。**

私はほとんど命令のように言った——**我々は強力な愛によって支えられて生きている。これほど強力なものは存在しない。これほど確実なものはない。これほどの偉大な調和はない。**

実は私が、こんなことが言える人間だとは知らなかった。脳出血という障害によって、ある種の絶望感を味わうことによって、それが可能になったと思える。

私はこれを、神聖なもの、不浄なるものという概念に、整理して考えることができるように思った。そして不浄なるものが、気づかれることなく、世界を支配していると思った。この「アンホーリー」という概念は「不気味」という概念に通ずる。

私はこのあたりのことが全くわからない。ただ、不気味なものが徘徊することだけがわかる。私が一番初めに体験した、いわば異常感覚の世界で、最も顕著なものは、薄い色の壁や床など一面に描かれた、しかし正常な感覚では見ることのできない、文字や絵や画像の、

圧倒的な「情報量」である。これは脳出血や脳梗塞によって、生じたものと考えられる。私はこういうものがあることを知らず――妻の世界に類似のものがあること以外は――この異常世界を初めて知ったことは驚きだった。これは特別に珍しいものでもないらしい。

これは単なるボヤケや、曖昧な錯覚のようなものでなくて、圧倒的に存在するものである。正確に読めはしないが、かなり正確に読めることもある。映像として見事な具体的現実性をもっている。例えば、帝国陸軍の大連隊のようなものが、延々と大行進をするようなことがある。(ほとんどはセピア色に見える。)これは何を意味するのだろうか？ その外には、奇術・魔術のような、自由自在なカラクリがどこまでも、不気味に展開することである。

私はこの特権のような私の能力を、それを全く持たない、妻・妹・娘の3人に面白おかしく情景描写をして聞かせたが、蛇などの不気味なもの以外は、けっこう面白かった。

しかしこれは、私の病状が治まると同時に、ほとんど完全に正常化するものであることがわかった。ひとたび、それが完全に消えた早朝、そこには至福のような平穏が訪れた。いったいこれは何だったのだろうか？

私はこの奇怪な体験を通じて、あらゆる話題へと道が通じていくことを知った。あまり感心できない不吉な話題も含め、真剣なあらゆる霊的・神学的な問題へと、次第に目が開かれていくのを覚えた。

——以上